

「日本の医療費 国際比較の視角から」

日本福祉大学教授 二木 立 著

近畿大学医学部講師・公衆衛生学

岡 本 悦 司

わが国の医療経済分野におけるパイオニア的教科書「医療経済学——臨床医の視角から」からちょうど10年の節目に、著者が再度世に問うたのが本書である。前著を読んで医療経済に開眼した人は数えきれず、最近のわが国の医療経済研究の目覚ましい発展は10年前とは隔世の観さえある。もはや“医療経済学とは何か”など議論する段階ではなく、医療経済学の手法を医療政策決定にどう生かしてゆくか、を議論すべき段階に入りつつある。

その意味で本書は、今後10年くらいのわが国の医療経済研究の方向を示す金字塔と言える。内容も、MRI、透析、高度先進医療、薬剤、リハビリテーションといったミクロ経済分析から、人口高齢化の医療費への影響といったマクロ経済分析まで広範囲にわたっており、新鮮で意欲的な発見が随所にちりばめられている。

特に透析医療については“アクセス、質、効果、医療費のすべての点でアメリカよりも高水準”と著者は絶賛している。多い透析と少ない腎

移植というわが国の腎不全対策の状況は、脳死や移植に関するネガティブな理由で説明されがちだが、こうしたポジティブな面からの分析は患者や医療従事者にとって大きなげみになるだろう。

他に病院チェーンや勤務医給与の動向という、医師なら誰しも気になる問題についても正面から取り組んでいる。本書を教科書として価値あらしめているもう1つの特徴は膨大な参考文献リストであり、その多くは著者が医学および経済学のデータベースを駆使して収集した英文文献である。その豊富さはアメリカの大学院のリーディングアサインメントをもしのぐ。それらのすべてに目を通すことは素人にはとても無理だろうが、今後、医療経済を専攻する大学院レベルの学生にとっては貴重な情報源になるだろう。

このように書くと、学部学生や一般の医療従事者とは無縁のハイレベルの本のように聞こえるが、本文そのものはわかりやすくかつ明快に書かれており、何より本書を最もお勧めしたいのは臨床の現場で働く医療

従事者に対してである。わが国は皆保険制の下、医療の価格は診療行為や薬品といったミクロレベルでこと細かに国によって統制されている。臨床現場の感覚が保険診療の支払方法や査定に反映されていない、という不満を持つ人は少なくない。しかし、臨床現場の感覚を政策決定者に理解してもらうためには、それが単なる要求(デマンド)ではなく、実証分析に裏打ちされた必要(ニード)であることを証明しなければならない。残念ながらこれまで医療経済研究の多くはエコノミストによって行われ、著者のような臨床医のバックグラウンドを持つ研究者は少なかった。著者が批判するわが国の“世界一の医療費抑制策”が可能だった1つの理由は、医療側に医療経済学という強力な武器を使いこなせる人材が欠けていたからではなかったか？その意味で本書は全医療従事者に対する著者からの強力なアピールでもある。

● A5 頁288 図15 表114 1995
定価3,708円(税込) 円400

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)